

[課題演習抄録]

主体的な学びに培う指導の在り方 —自己調整学習に着目して—

永 石 一 貴

Itsuki NAGAISHI

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース

キーワード：自己調整学習，メタ認知，モニタリングシート

1 研究の目的と方法

現在求められている学びの1つに主体的な学びがある。「中学校学習指導要領(平成29年度告示)解説総則編」とOECD(2019)のEducation2030によると、主体的な学びとは生徒エージェンシーと同じであり、生徒が生涯にわたって、自分自身で学習していくために、自分自身の学習に責任を持ち、学習を振り返りながら学んでいくことと言える。

これを踏まえ、本研究では自己調整学習に着目する。なぜなら自己調整学習は、「学習者が、メタ認知、動機付け、行動において、自分自身の学習過程に能動的に関与していること」(Zimmerman 1986)だからだ。こうした自分自身で学習過程を設定し、修正や振り返りを行うことは、主体的な学びにつながると考える。

さらに、この自己調整学習ができるようになるためには、上に記述した定義より、メタ認知することが必要である。三宮(2008)によると、このメタ認知は、自分自身の学習について自分でモニタリング(セルフモニタリング)し、自分でコントロール(セルフコントロール)することとされる。そして、このメタ認知力はセルフモニタリングとセルフコントロールが循環することで機能する。

よって、主体的な学びを培うために自己調整学習をその学習スタイルとすることは、自分自身で学習過程を設定し、修正や振り返りを行う学習であるため、主体的な学びに対する現状を踏まえると大変有効であると考えられる。

これを踏まえ、本研究の目的を、中学生に主体的な学びを培う指導の具体を追究することである。そのためにメタ認知を育成する授業とそれを踏まえた年間指導計画の開発を行う。具体的な指導として、生徒が自分の学習過程をメタ認知できるよ

うにするために、生徒に自己評価をさせる。本研究の自己評価は、到達状況を捉えることを目的としたものとは異なり、生徒が自己の学習状況を把握することを目的としたものである。これにより、生徒自身が、自分ができていることやできていないことなどに気づき、復習することや次の学習へつなげることができる。

自己評価について、田山(2019)は次のように述べる。「自己評価そのものが学習者の主体的な気づきの機会をもたらすものであり、指導者の適切な指示・助言、振り返り活動の方略を工夫することにより本来の学習活動に対して、その成果を強化したり広げたりする効果が期待できる」。このことから、自己評価は学習者である生徒に主体的な気づきをもたらすものであり、生徒の学習の改善に役立てるものであると言える。こうした田山の自己評価についての考えを踏まえ、本研究では、生徒に自己評価させるツールとして「モニタリングシート」を開発し、学習に活用する。このモニタリングシートを作成するにあたっては、大島、千代西尾(2019)を参考にした。大島、千代西尾は「モニタリングシート」の効果について「問題解決に必要なステップごとに区切って、各段階でどのようなことをモニタリングする必要があるのかを確かめながら学習できる」と述べている。

2 研究の計画

本研究の目的を踏まえ、まず生徒がメタ認知についてどの程度できるか把握するため、セルフモニタリングのアンケート調査、セルフコントロールの学級活動での授業実践を行う。次に、上記の実態把握を踏まえて「モニタリングシート」の開発を行う。さらに、「モニタリングシート」を活用した教科(数学)の授業実践を行う。上記のように、

本研究は、実態把握、ツールとなる「モニタリングシート」の開発、「モニタリングシート」を活用した実践の3段階で構成される。本研究により、生徒が学習を振り返る機会を増やし、自分の学習状況について把握するとともに、次の学習へつなげたいと考える。

次項の研究の内容では、上記の研究のうち、授業実践1(特別活動における実践)の考察と、それに基づいて開発した「モニタリングシート」の活用(「モニタリングシート」のみの実施と授業実践2(教科(数学)における実践))について述べる。

3 研究の内容

(1) 実態把握(セルフモニタリングについて)

セルフモニタリングの取り組みとして、アンケート調査と授業実践をA中学校の1年生1学級を対象に行った。これは実態把握とともにメタ認知に意識を向けることを意図している。まず調査であるが、内容は、テスト前の学習方法についてであり、テストに生かされている学習方法や得意教科など、6つの項目を設けた。次に、学級活動の授業実践を行った。内容は、他者の学習方法を参考に、自分の学習方法を見直す活動である。

(2) 「モニタリングシート」の開発と実践

① モニタリングシートの開発

A中学校の2年生1学級を対象として、「モニタリングシート」を説明し、回答させた。問題の内容については、数学の連立方程式の利用の問題を採用した。この問題を解くためのステップを5つに分けて、それをモニタリングする質問の項目を設けた。「モニタリングシート」の目的は、生徒がメタ認知することに慣れ、経験化できるようにすることである。そこで、「モニタリングシート」には、「この問題を解くには何が分かっているか」という問題解決に必要なステップごとに項目やモニタリングを行って復習したいと思ったことを書く欄も設定した。

② 「モニタリングシート」を活用した授業実践

「モニタリングシート」を使って教科(数学)の授業実践を行った。A中学校の2年生2学級を対象とした。内容は、二等辺三角形の性質について証明することで、二等辺三角形の新しい性質を見出すことである。この授業の終わりに、生徒に「モニタリングシート」を回答させた。今回の「モニタリングシート」には、どれくらい理解したかとその理由、前回までの授業とつなげることができ

たか、今日の授業からどんなことを復習したいと思ったかの4つの項目を設けた。なお、本研究で開発したツールや実践の具体は、研究論文「主体的な学びを培う指導のあり方-「モニタリングシート」の開発・活用を通して-」に詳述する。

4 成果と課題

本研究の成果と課題を生徒に対するものと教師自身の2つの点から整理する。

まず生徒に対する成果と課題である。生徒は、自分の学習を振り返ることで、次の学習に向けて復習したいことを把握することはできていた。しかし、自分を振り返ることの必然性を感じていないという現状があると分かった。つまり、振り返ることを意識したり、その必要性、価値を認識していないと考えられる。この結果は、多くの授業で日常的に振り返りは行われているものの、それが次の学習に向けた自覚的なものになりえていない状況であることを示唆する。生徒の主体的な学びを培うため、自分自身の学習をメタ認知することの必然性を生徒に自覚させる学習を集積する必要がある。

教師自身の成果として、生徒が振り返りから復習したいことを把握できていたため、「モニタリングシート」は生徒のセルフモニタリングに有効的であることが分かった。しかし、課題として、生徒が質問の意味が分からず、「モニタリングシート」の回答に時間がかかっていたことから、生徒がこうした振り返る行為に慣れていないということが分かった。このことから、「モニタリングシート」を授業の最後に毎時間行い、セルフモニタリングを習慣化することが必要である。

以上の成果と課題を踏まえ、本研究を進める過程で、単発的なモニタリングでは十分ではないことがわかった。そのため、今後は、年間指導計画を作成し、「キャリア・パスポート」の学習と関わらせながら、計画的、意図的なモニタリングの指導に努めたい。

主な引用・参考文献

- 大島純、千代西尾祐司(2019)『主体的・対話的で深い学びに導く学習科学ハンドブック』(北大路書房)、54-58
 三宮真智子(2008)『メタ認知 学習力を支える高次認知機能』(北大路書房)、7-12
 田山享子(2019)「小学校高学年「教科」外国語に向けた自己評価改善の試み-新学指導要領が育成を目指す資質・能力に基づいて-」共栄大学研究論集(18)、185-199
 中学校学習指導要領(平成29年告示)解説総則編